

種苗交換により導入したスイレンについて

西内良

2020年4月、(公社)日本植物園協会が斡旋する種苗交換により、神代植物公園から2種の熱帯性スイレンを受領した。その経過を報告する。

受領品種と数量

Nymphaea colorata 3株
(以下、コロラタ)

Nymphaea colorata alba 3株
(以下、コロラタ・アルバ)

コロラタはタンザニア原産。コロラタ・アルバはその白花変異体である。

導入目的

熱帯スイレンは温室の植物として扱われることが多かったが、夏季には屋外で育てることができ、水面に花を涼し気に咲かせる様子は夏季の屋外園芸植物として大きな可能性を秘めている。そのため、小型でありスイレン鉢でも育てやすい種および品種であり、かつ、園芸品種の交配親としても用いられた例のあるコロラタおよびコロラタ・アルバを導入し、展示および交配親として用いることを目指した。

栽培環境

2020年4月下旬、受領した株を1株ずつ4号鉢または3号鉢に定植した。用土は赤玉土細粒と酸度調整済ピートモスを3:1で混合したものを用いた。元肥としてマイガーデン元肥用(N:P:K:Mg=10:18:7:0.42)を、用土1リットル当たり5g混ぜ込んだ。初期管理として、4月下旬から6月中旬まで育苗温室B内にて、黒色のプラスチック製スイレン鉢(口径38cm、深さ21cm)に3株をまとめて沈めた状態で、無加温の栽培を行った。

6月上旬、コロラタ、コロラタ・アルバともに根と根茎の腐敗が見られたため、腐敗部分を取り除き、根を整理し、新しい用土で植え直しをおこなった。植え直し時の鉢は3号および2.5号を用いた。肥料はマイガーデン元肥用(前述した肥料と同じもの)を用土1リットル当たり5g混ぜ込んだ。また、コロラタ、コロラタ・アルバともに腋芽を株分けし、予備株として別の鉢に植え付けた。この予備株は他の熱帯性スイレン交配種の入った水鉢にまとめて沈めた。この作業以降の6月中旬から10月中旬にかけて、予備株を含めたすべてのコロラタ、コロラタ・アルバを無遮光の屋外にて管理を行った。

経過と所感

先方の株分け・発送作業日及び受取日の都合上、無加温栽培としては植え付けや植え替え適期前にあたる、4月下旬での植え付けとなった。

コロラタ、コロラタ・アルバともに梅雨明けの高温期に根が肥料焼けを起こし、浮葉が委縮した。小さな容器で管理したため、夏季は水温が40°C近くなり、肥料の溶け出しが早かったこともあるが、同条件で栽培したカペンシス系交配種やミクランタ系交配種よりも多肥の害が出やすい印象を受けた。なお、施肥量については、パッケージ記載の適量の範囲であった。しかし、植え込みが水中にあることと、水温約40°Cという条件が、一時的に用土中の肥料濃度を著しく上昇させたと考えられた。また、トラフユスリカの幼虫による水中葉と浮葉の食害が著しかった。なお、葉の食害について、他の交配種とまとめて同じ水鉢で管理した予備株らを観察した結果、コロラタ・アルバについては、コロラタや他の交配種よりもトラフユスリカの幼虫による食害を受けやすい印象を受けた。耐寒性スイレンを含め、スイレン属の野生種、交配種間において、昆虫やカエル類の幼生(オタマジャクシ)による食害の受けやすさに差があるのではないかと感じている。

最終的に、コロラタとコロラタ・アルバともに、生育期である7月~9月を通じ、株の状態が良好にならなかった。そのため、両種ともに開花数は2輪3株と、非常に悪い結果となった(写真)。

今後について

本稿執筆時の2021年1月現在、コロラタ、コロラタ・アルバともに休眠状態で管理している。4月上旬に発芽させ、無加温環境の場合の植え付け適期にあたる、5月下旬に植え付けを行う予定である。また、一部の株はトラフユスリカの食害を避けるため、7月上旬の植え付けとする。これは、6月以降の梅雨時期に発生ピークを迎えるトラフユスリカの防除に仮に失敗した場合、後者のほうがスムーズな生育をする可能性があると考えからである。そして、熱

帯スイレンの他の交配種の栽培時よりも、用土中の肥料濃度が高くなりすぎないように施肥量、水温、用土量を管理する。

コロラタはN. 'King of Siam'、N. 'Midnight'等、八重咲き品種の交配親となっている。来夏はこの度の反省を生かして開花数を伸ばす。そして、筆者が育種中の個体を含む、小型品種を子房親にし、コロラタとコロラタ・アルバを花粉親にして、小型で八重咲きの品種の作出を目的に交配を行いたい。

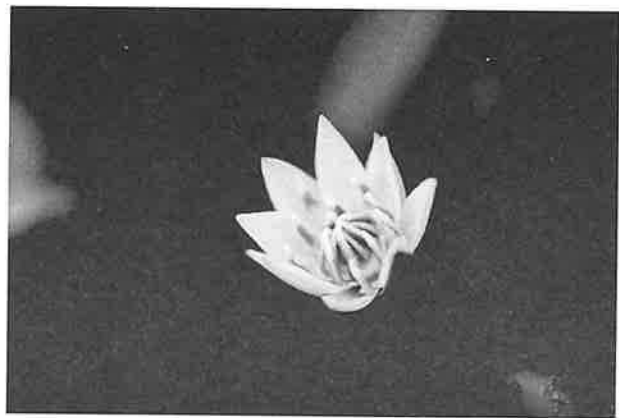


写真 育苗温室裏で開花したコロラタ・アルバ 9 cm ポリポットに植えこんだ株

平成31年度植物交換記録

国外

導入 (表1)

平成30年9月に農林水産省神戸植物防疫所より、植物防疫の厳格化の通知があり、検査証明書の添付のない植物は、植物防疫法に基づき例外なく廃棄処分されることとなった。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う各国のロックダウンに伴い、郵送や手続きにも支障が生じた。そのため、今年度の種子交換事業で導入できたのは、ロシアのシベリア植物園からの2種のみであった。また、広島市の友好都市である米国ハワイ州ホノルル市のホノルル植物園よりハワイ固有種8種の提供を受けた。このうち、7種が生育中である。1種は未発芽、2種は不明である。

分譲 (表2)

SEEDLIST2019-2020を発行し、種子交換を継続している11か国計17園に電子メールで令和2年3月に提供を行った。その結果、ハンガリーのハンガリー科学アカデミー植物園とチェコのプルゼン動植物園の2園から計9種の注文があった。

国内 (表3)

導入

環境省新宿御苑(東京都)や神代植物公園(東京都)よりラン科植物、広島カクタスクラブの会員よりサ

ボテン科植物など、17か所から67品目の種苗を導入した。

分譲

横浜市こども植物園(神奈川県)・北里大学薬学部附属植物園(神奈川県)・武田薬品工業株式会社京都薬用植物園(京都府)へカカオノキほか、大船フラワーセンター(神奈川県)へ変化朝顔など、6か所へ17品目の種苗を分譲した。

(久保 晴盛 記)

表1 平成31年度 海外施設より種子導入

	科名	植物名	導入施設(国名)	生育状況
被子植物	イノマツ	<i>Sempervivum charadzeae</i>	シベリア植物園(ロシア)	-
	パイナップル	<i>Datura metel wrightiana</i>		-
	マメ	<i>Acacia koa</i>	ホノルル植物園(アメリカ)	○
	マメ	<i>Erythrina sandwilensis</i>		○
	アオイ	<i>Gossypium tomentosum</i>		○
	アオイ	<i>Sida fallax</i>		×
	ケシ	<i>Argemone glauca</i>		○
	バラ	<i>Ostemeles anthyllidifolia</i>		○
	ムクロジ	<i>Sapindus saponaria</i>		○
	イラクサ	<i>Pipturus albidus</i>		○

表2 平成31年度 種子交換による分譲種子一覧表

目録No.	科名	植物名	受注数	相手国
3	スイカズラ	オトコヨウソメ	1	ハンガリー
10	スイカズラ	ツクパネウツギ	2	ハンガリー、チェコ
11	キク	キセルアザミ	1	チェコ
28	シソ	ヤブムラサキ	2	ハンガリー、チェコ
41	ミカン	イヌザンショウ	1	チェコ
42	ムクロジ	ウリカエデ	1	ハンガリー
50	キジカクシ	オオバギボウシ	1	チェコ
51	キジカクシ	コバギボウシ	1	チェコ
57	ユリ科	ヤマジノホトギス	1	ハンガリー